

自著と
その周辺

消化器疾患 最新の治療 2007-2008

編集 菅野健太郎, 上西紀夫, 井廻道夫
著者 池上俊彦 他

南江堂
440頁
2007年3月30日発行
定価 9,450円

他の領域と同様に、消化器領域においても専門分化する傾向は強く、しかも、新しい知見が日々増えていく。こうした中で、消化器疾患の基礎から臨床までを up-to-date に把握していくことは容易なことではない。本書はわが国の消化器疾患の治療に関する最新の情報を幅広い角度から提供するように2年毎に項目を見直しながら編集されてきた。それぞれの項目は、最新の情報を踏まえ各分野の第一人者により分担執筆されており、治療理論の基本になる疾患概念や診断方法などの重要なポイントに関しても簡潔に解説を加え、読者が疾患自体に対する最新の考え方や診断法についても学ぶことができるように工夫され、また、必ずしも定説とはなっていない新規性の高い治療のトピックスも数多く取り上げられている。

2007-2008年版は自治医科大学の菅野健太郎教授、東京大学の上西紀夫教授、昭和大学の今廻道夫教授により編集されたものであるが、この版においても、これらの基本的な体裁を保ちながら、随所に新しい考え方や、新規に保険適用となった疾患や治療法が取り入れられており、2年という時間サイクルの中でも消化器疾患の治療が変わっていることが実感される。この中で特にウイルス性肝炎の治療に関しては、新しい抗ウイルス薬の登場やインターフェロンの保険適用化などが挙げられる。

また、最近はこの領域と同様に消化器外科領域でも多数のガイドラインが学会や厚生労働省等の研究班を中心に作成され、治療体系の整備、標準化が進められており、本書でも多くの項目においてこれらのガイドラインについて言及されたり引用されたりしている。現在も新たにガイドラインが作成され、また、すでにあるガイドラインも更新されている。今後標準的治療体系としてガイドラインが整備充実してくると、さらにガイドラインの重要性は増していくものと考えられ、基本的な治療指針はガイドラインに沿って行うことになると思われる。

本書を概観してみる。全体は巻頭トピックス、消化器疾患の主要な治療法、消化器疾患の主要な対処療法、消化器疾患、肝・胆・膵疾患、の5章からなり、それぞれがいくつかの項目に分けられている。

著者はこの肝・胆・膵疾患の中の生体肝移植というテーマを担当した。本邦において最初の生体肝移植は1989年に島根医科大学で行われた。信州大学医学部附属病院において生体肝移植が行われたのは1990年6月のことであった。本邦での3例目となるこの患者も、移植後20年を経過したが、今では就職し、生体肝移植患者の中での本邦最長生存例となっている。その後1993年には世界に先駆けて成人間の生体肝移植に成功し、200余例の生体肝移植を施行して、本邦における肝移植をリードしてきた。当初は小児の進行した慢性肝疾患に対する緊急避難的処置として開始された生体肝移植は、多くの疾患に対して健康保険も適用となり、今や一般的な医療として定着した感がある。このような中で、消化器領域の代表的な治療法の一つとして生体肝移植が取り上げられ、これを執筆する機会を与えられたことは、まことに感慨深いものがある。本書の中では、生体肝移植の主要な疾患である胆道閉鎖症、B型肝炎、C型肝炎、原発性胆汁性肝硬変症、肝細胞癌劇症肝炎を取り上げ、適応・禁忌、術式の選択、全国集計での成績、レシピエントの合併症とその対策などを概説した。本邦の生体肝移植の成績は諸外国と比べても良好であり、一般的な医療として認められたといっても、まだまだ合併症が多いのも事実である。今後とも引き続きこれらの解決を図らなければならない。また、生体肝移植ではドナーの危険性の存在は、生体肝移植が抱える最も大きな課題である。この解決のためには、引き続きドナーの安全性の確保に取り組むとともに、脳死肝移植数の増加が重要である。脳死移植を巡っては、2010年7月から改正臓器移植法が施行され、施行数が増加することが期待されているが、まだ国民の中にも様々な意見があり、また、医療事故等に関する報道の増加が医療不信を招いていることもあり、脳死肝移植数の増加を実現することは容易なことではない。移植医療に従事するものとして、引き続き真摯な態度で臨んでいきたい。

(信州大学医学部附属病院医療福祉支援センター 池上 俊彦)